

## 短大幼稚園教員養成における実践力育成：予備調査結果から

山下 由佐, 藤谷 智子, 生地 加代  
(武庫川女子大学文学部教育学科)

### Promotion of practice power in junior college kindergarten teacher education : From the preliminary investigation result

Yusa Yamashita, Tomoko Fujitani, Kayo Ikuchi

*Department of Education, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

The purpose of the entire this research is to clarify the problem of the curriculum at the teacher training course in the junior college, and to develop the curriculum with making evaluation system about the curriculum. As a first step for that, this preliminary investigation was done to comparing the junior college student's self-evaluation with the university student. The questionnaire investigation was executed before and after the class.

It was shown that the university student was more intrinsic interested and more positive coping with their own problem. Also, it was shown the college student needed more practicing contents. The improved syllabus of "Practicum in the Teaching Profession" was presented based on this research results.

Key Words: kindergarten teacher education, Practicum in the Teaching Profession, practice power

#### 1. はじめに

筆者らが所属する武庫川女子大学短期大学部及び同大学では、文科省によって平成22年度入学生の卒業年度から実施が義務付けられている「教職実践演習」科目を、平成20年度から、小学校・幼稚園教諭課程とともに開講し、現在授業を運営しているところである。この科目は単なる演習科目ではなく、教員として就職するための資質能力を大学が保証するという目的をもち、また学生にとっては資質能力を高め、教員就職に対する自信と自覚を持つための、いわば教職に就くための総まとめの科目と位置づけることができる。

筆者らの研究全体の目的は、この科目を核として、短大における教員養成課程のカリキュラムの課題を明確にし、事後評価指標の作成とカリキュラムの開発を行うことである。そのための第一歩として、本研究においては、短大履修者の履修前後の自己評価を、主として大学生と比較することによって、次年度以降の調査研究および科目運営に繋げていきたいと考える。

#### 2. 実践力のある教員の養成

幼稚園教員養成課程を含めた教員養成課程においては、実践力のある教員の育成が今日的課題となっている。文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」においても、教員養成に関するプログラムが見受けられる。例えば平成18年度には鳴門教育大学の「教育実践の省察力をもつ教員養成—教育実践力

自己開発・評価システムを組み込んだ教員養成コア・カリキュラムの展開を通して」や、新見公立短期大学の「実践力が育つ保育者養成システム—実習・ボランティア・卒後指導を軸とした体系的学習支援」などがあり、また平成19年度には島根大学「確かな教師力を育む多角的評価の実現」や都留文科大学の「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発」などがある。これらの試みにはそれぞれの特徴があるが、どの教員養成においても体系的に多面的に学生支援を行っていることがわかる。

本学でも、教育ボランティア活動や特別支援ボランティア、附属幼稚園の預かり保育ボランティア等の幼稚園におけるインターンシップ、授業における附属幼稚園での観察参加、また実習においては事後の自己評価等を通して、幼稚園教員としての資質能力の育成に取り組んでいる。さらに、「教職実践演習」も平成20年度から開講して積極的に教員養成に取り組み、教員就職においてかなりの実績を上げている。しかし、教員養成システムとしての全体的機能を自己評価し、それを実践に活かすというPDCA (Plan → Do → Check → Action) プロセスを作り上げているとはいいがたい。多くの教員養成課程が同じ状況にあると言えるだろう。

そこで、実践力のある教員を育成するために新たに設けられた「教職実践演習」科目を中心に、教員養成課程カリキュラムの効果を検討することは意義のあることと考えられる。

#### ・教職実践力とは

教職実践力とは何かということは明確になっていない。「教職実践演習」科目に含まれるべき事項はもちろん重要な内容ではあると考えられるが、実践的な研究によって明らかにしていく必要があるだろう。本学では、これに関して、2007年度に文科省の委託事業に採択され、その結果を「地域のニーズに応え、信頼される教職実践力を育む「教職課程」の課程認定後の事後評価法に関する調査研究—特に小学校教職課程に係わる課程認定事後評価指標を主たる対象として—」(武庫川女子大学教職課程事後評価法検討委員会, 2008)<sup>1)</sup>としてまとめている。その調査研究は、初任期の小学校教員に欠けている資質能力や課題について、教育委員会や小学校長に面接調査を行った結果をもとに、教員養成の課題及び評価指標を明確化することを目的としたものであった。本学周辺の府・県・市の教育委員会計11と小学校24を対象として、1)教職への情熱・意欲・教職倫理観、2)社会的対人関係能力、3)児童理解および学級経営能力、4)教科指導力、5)一般教養や基礎学力の各領域に関して調査を行った。各領域別の課題を抽出し、大学で対応すべき事柄を整理したうえで、「大学の教員養成課程の評価項目概要」を作成した。1)大学における教員養成の理念・目的・目標における観点、2)教職課程における“基盤力”の育成、3)児童理解と学級経営のための能力の育成、4)実践的な教科指導力の育成、5)一般教養や基礎学力の育成の5領域とし、それらの下位指標項目を設けたのである。今後は、これらの指標を、学生の教育と評価、及びカリキュラムの評価に用いていく予定にしている。

しかし、この研究は小学校教員を対象としており、部分的には幼稚園教員養成に共通するものの、幼稚園教員に不可欠な実践力について検討する必要がある。

#### ・実践力を実証的にとらえる

大学で育成すべき資質能力をめぐる研究としては、学生への意識調査や保育士への意識調査が行われている。例えば、水谷他(2006)<sup>2)</sup>では、幼稚園や保育所に就職して2年目と6年目の教員・保育士を対象に、質問紙調査を行い、保育職選択の理由、保育者に求められる資質と知識・技能、保育者としてのやりがい等を尋ねている。その中で、本研究と関連する保育者に求められる資質としては、研究心、子どもへの愛情、責任感、協調性、明朗快活さ、根気強さ、健康、創造性、安定した情緒、専門職としての自覚、保育者に必要な知識・技能としては、保育に関する理論、発達や生涯に関する専門的知識、保育者の状況と意識の変化、社会的常識、子育てに関する社会の動向、ピアノ・造形などの技能、子どもを扱う方法・技術、人間関係を円滑にする力、カウンセリングの基礎といった項目で、幼稚園教諭と保育士、経験の長短での比較を行っている。幼稚園教諭・保育士養成機関の立場からすると、すでに保育職について幼稚園教諭・保育士に求められる資質や必要な知識・技能を参考にしながら、学生の現在の

状態を把握し、カリキュラム改善に資することのできる質問紙の作成が求められるだろう。

また、特色 GP を見てみると、学生の自己評価を用いている実践や、単に学生の代表的なしかも肯定的な意見の紹介に終わっている実践もあり、実証性に乏しい面がある。

本研究では、予備調査としての学生の自己評価をもとに、教員の評価や卒業後の教員となってからの自己評価等、多面的に実証的に実践力を捉えていこうと考えている。

#### ・適性処遇交互作用という観点

上記の実証性を確保するという点からも、教育心理学的に効果の分析をする必要がある。本研究では、予備調査をもとに、教育効果を学生の特性との関連で分析すること、つまり適性処遇交互作用の枠組みで分析する予定である。こうした分析をもとに、学生個人に適合した教員養成プログラムを見出していけることと期待される。

### 3. 研究全体および本予備調査の目的

本研究は、全体としては3年の期間で、次のことを明らかにしていきたいと考えている。

- 1) 幼稚園教諭課程の「教職実践演習」科目履修の前後の学生の意識や自己評価の変化を質問紙調査によって捉え、授業の効果を、学生の特性や教育・保育現場での経験及び全般的な学力との関係との交互作用として分析し、明らかにすること。
- 2) 幼稚園園長にインタビュー調査を行い、聴取した内容を、大学・短大で養成することが求められている資質能力の観点から整理し、事後評価指標作成とカリキュラム開発に生かすこと。
- 3) 卒業生や現場の幼稚園教員を対象に質問紙調査を行って、初任期教員の問題点を分析し、2)の結果と総合して、問題点を克服するようなカリキュラムを開発すること、及び事後評価指標を考察していくこと。
- 4) 研究の過程で作成する、授業後の評価項目及びカリキュラム自体の事後評価の規準を、使用しながら改善していくことである。

このうち、1)については3年間連続して調査を行い、科目が必修化される最終年度の結果を、前2年度と比較することで、特に学生側の要因、例えば授業以外での活動や教職への意思の影響が明確になる可能性が高いと考えられる。それらの要因と授業の交互作用を取り出すことによって、学生一人一人にあったプログラムも示唆されることと期待している。さらに、大学生と短大生との比較も行い、短大特有の課題を検討することも重要な目的である。

また、3)の卒業生への質問紙調査では、学生時代に「教職実践演習」科目を履修した者とそうでない者とを対象とし比較していく中で、当科目の現場で通用する実践力への効果を検討することができる。

本予備調査においては、上記の本研究全体の目標のうちの1)にあげてある、幼稚園教諭課程の「教職実践演習」科目履修の前後の学生の意識や自己評価の変化を質問紙調査によって捉え、授業の効果を、学生の特性や教育・保育現場での経験及び全般的な学力との関係との交互作用として分析し、明らかにすることについての予備調査を行う。平成20年度は、短大生に対しても大学生に対しても、同じ3名の教員が担当し、ほぼ同一の授業を展開しているため、科目履修の前後の学生の意識や自己評価の変化を短大学生と大学生を比較することによって、短大生の特徴を抽出し、今後の科目内容や方法に活かしていくことができると考えている。

ただし、平成20年度においては短大生に対して1クラス約30名規模での開講としたため、履修希望者全員の履修はかなわず、選抜せざるをえなかった。履修希望者のうちGPAのよる成績上位の32名に履修許可を出している。希望者を募る際にも、選考があることを伝えていたため、成績の下位の者は希望を出していない。対象者は、短大生の中でも、成績も良く、よい教員・保育士になりたいという意欲を強くもっている学生に限られたということが、どのように結果に影響を及ぼしているかも考察していかなければならない。

#### 4. 本予備調査の方法

幼稚園教員向けの「教職実践演習」は、平成20年度は「教職実践演習Ⅱ」として、後期に週1回2時限続きの授業を実施した。大学2クラス、短大1クラスの演習形式の授業である。初めての開講なので、履修希望者数を予測して開講したが、大学生は予想より少なく、短大は多く、上記のように選抜をすることとなった。授業の担当者は3名で、1人が4回の授業と、オリエンテーション、現場の教員の講話、総括の会では、合同で担当し、のべ15回(90分×2×15回)の授業であった。

質問紙調査は、1回目の授業の際と、最後の回に実施した。1回目に欠席した学生については、後日回答を求めた。履修者および回答数は、大学32名、短大31名である。

事前の質問紙の項目は、①科目履修の動機12項目(5件法)、②履修前の幼児との関わり体験12項目(4件法)、③教育実習後で感じた自己の課題13項目(5件法)、④授業で身につけたいこと13項目(5件法)、及び自由記述欄であり、③と④は同一の項目である。事後の質問紙は、①身につけていると思うこと13項目(5件法)、②身につけていないと思うことについての自由記述、③授業で伸びた力13項目(5件法)、④③に関する自由記述、⑤今後さらに身につけたいこと13項目(5件法)および自由記述であり、①③⑤は同じ項目を使用した。各質問項目内容については、結果を参照されたい。

#### 5. 本予備調査の結果および考察

##### (1) 科目履修の動機 (Table 1.)

短大・大学ともに、単位のためや他者から勧められたからという外発的な動機ではなく、実践力や幼児への理解力を高めたいという気持ち、また授業の内容への関心から履修している。短大と大学で平均値の差が有意だったのは、項目4、5、6、7であり、大学生の方が、内発的な動機づけがより高いこと

Table 1. 「教職実践演習」履修動機の短大と大学との比較

項目	短大	大学
1 幼稚園への就職が決まっているので	1.71 1.32	2.00 1.48
2 これから幼稚園に就職したいと考えているので	3.97 1.22	4.16 1.42
3 どのような科目か興味があったので	4.35 0.66	4.34 0.87
4 実践力を高めたいと思ったので	4.71 0.46	4.94** 0.25
5 幼稚園現場で活動することに興味があったので	4.42 0.67	4.81** 0.54
6 幼稚園現場の先生の話を聞く機会があるので	3.97 1.05	4.56** 0.50
7 幼児を理解する力を高めたいと思ったので	4.48 0.57	4.94** 0.25
8 担当の教員に魅力を感じたから	3.97 0.75	4.22 0.75
9 教員に勧められたので	2.13 1.02	1.75 0.92
10 友人に誘われたので	2.06 1.09	2.16 1.35
11 単位修得の関係で単位が必要なので	1.16 0.45	1.34 0.87
12 平成22年度入学生からは必修化される科目なので	1.97 1.20	2.19 1.40

Table 2. 「教職実践演習」履修前経験の短大と大学との比較

項目	短大	大学
1 保育所での実習経験	3.26 0.86	2.42** 1.23
2 大学の授業期間に、幼稚園でのボランティア活動	1.55 0.85	2.19** 1.17
3 大学の授業期間に、保育所でのボランティア活動	1.29 0.59	1.60 0.89
4 夏休みなどの長期休暇中に、保育所でボランティア活動	2.06 1.06	1.77 1.02
5 健常の幼児を主な対象とするボランティア活動	1.90 1.11	2.60* 1.22
6 幼児対象の特別支援ボランティア活動	1.23 0.50	1.33 0.66
7 健常な小学生を主な対象とするボランティア活動	1.26 0.73	1.77* 1.07
8 小学生対象の特別支援ボランティア活動	1.29 0.74	1.53 1.14
9 ベビーシッターのアルバイト	1.19 0.65	1.06 0.25
10 幼児教室・公文などでの幼児対象のアルバイト	1.13 0.56	1.19 0.48
11 保育所でのアルバイト	1.32 0.91	1.42 0.96
12 その他の幼児を対象とするアルバイト	1.13 0.43	1.10 0.54

各表とも上段は平均値、下段は標準偏差 \*\*  $p \leq 0.01$  \*  $p \leq 0.05$

が見て取れる。また、現場の教員の話を書く機会があるというシラバスからの情報をもとにした期待も大学生の方が高いことがわかる。

## (2) 「教職実践演習」履修前の経験 (Table 2.)

大学生では保育士課程を履修していない学生もいるので、短大生の方が実習経験はあるが(項目 1), さまざまなボランティア活動では大学生の方が多い(項目 2, 5, 7)。

## (3) 実習後に感じた課題及び授業で身につけたいことについて

Table 3. が、「実習後に感じた課題」である。どの項目も評定値が高く、学生たちが実習経験によって、自分には多くの課題があり、さらなる学習が必要だと考えていることが示された。その中で、短大生が大学生よりも強く感じたのが、項目 2 の「教員としての確かな意志」であり、まだ教員になる意志が弱い自分への気づきが短大生の特徴と言えるだろう。また、大学生の方が高かったのが、項目 3 の「学級経営の力」である。これは、大学で学ぶ講義だけでは習得することが難しい部分であり、実際に自分が教員になった後を想像した時に、教員の仕事の難しさとして実感した部分と言える。

Table 4. が、「授業で身につけたいこと」であるが、これも同様にどの項目も評定値が高い。また、どの項目も、短大生よりも大学生の方が高い値であるが、有意だったのは、「他の教員との関わり方」と「保護者との関わり方」であった。

さらに、Table 5. が、「実習後に感じた課題」と「授業で身につけたいこと」との相互相関である。「実習後に感じた課題」(③)と「授業で身につけたいこと」(④)の同じ項目での相関が高くなることが予想された。つまり、実習を終えて自分にとっての課題だと感じているほど、授業で身につけたいと思うであ

Table 3. 実習後に感じた課題

項目	短大	大学
1 豊かな人間性	4.30	4.48
	0.79	0.72
2 教員になる確かな意志	4.03	3.78
	1.02	1.21
3 学級経営の力	4.29	4.65*
	0.78	0.66
4 遊びを集団として指導していく力	4.47	4.78*
	0.63	0.42
5 教育課程の理解	4.00	4.03
	0.89	0.82
6 季節・地域を考慮した環境構成のしかた	4.35	4.53
	0.84	0.57
7 幼児の発達過程の理解	4.57	4.45
	0.57	0.72
8 障害児への配慮の仕方	4.39	4.52
	0.76	0.57
9 幼児の表現活動への支援	4.45	4.48
	0.72	0.81
10 いざこざ・けんかへの介入の仕方	4.45	4.59
	0.62	0.61
11 幼児一人ひとりへの配慮と受容	4.45	4.53
	0.72	0.67
12 教員との関わり方	4.39	4.25
	0.62	0.76
13 保護者との関わり方	4.45	4.53
	0.77	0.72

Table 4. 「教職実践演習」の授業で身につけたいこと

項目	短大	大学
1 豊かな人間性	4.29	4.56
	0.90	0.62
2 教員になる確かな意志	4.03	4.06
	1.08	1.08
3 学級経営の力	4.45	4.72
	0.72	0.58
4 遊びを集団として指導していく力	4.61	4.84
	0.76	0.37
5 教育課程の理解	4.19	4.34
	0.79	0.79
6 季節・地域を考慮した環境構成のしかた	4.55	4.44
	0.77	0.72
7 幼児の発達過程の理解	4.48	4.56
	0.72	0.67
8 障害児への配慮の仕方	4.29	4.63
	0.97	0.61
9 幼児の表現活動への支援	4.61	4.69
	0.67	0.47
10 いざこざ・けんかへの介入の仕方	4.42	4.59
	0.85	0.61
11 幼児一人ひとりへの配慮と受容	4.48	4.66
	0.81	0.55
12 教員との関わり方	4.29	4.63*
	0.94	0.61
13 保護者との関わり方	4.35	4.69*
	0.98	0.54

Table 5-1. 実習後に感じた課題と授業で学びたいこととの関連性(短大生)

	③ 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
④ 1	0.735**	0.208	0.018	0.137	0.297	0.212	0.232	0.268	0.201	0.352	0.355	0.572**	0.141
2	0.378*	0.333	0.028	-0.109	0.260	0.171	0.190	0.065	0.109	0.225	0.152	0.031	-0.099
3	0.243	0.070	0.291	0.221	0.421*	0.222	0.089	0.217	0.426*	0.272	0.490**	0.418*	0.401*
4	0.197	-0.242	0.307	0.368*	0.204	0.170	0.142	0.268	0.389*	0.451*	0.329	0.331	0.366*
5	0.219	-0.008	0.175	0.254	0.469*	0.345	0.549**	0.314	0.308	0.222	0.308	0.525**	0.235
6	0.374*	0.105	0.115	0.250	0.324	0.309	0.308	0.195	0.320	0.162	0.380*	0.594**	0.245
7	0.145	-0.067	0.214	0.225	0.426*	0.312	0.504**	0.375*	0.333	0.312	0.333	0.538**	0.313
8	0.668**	0.193	0.061	0.295	0.314	0.319	0.462*	0.384*	0.234	0.381*	0.424*	0.586**	0.220
9	0.573**	0.019	0.159	0.293	0.328	0.313	0.522**	0.436*	0.375*	0.354	0.305	0.458**	0.353
10	0.683**	0.100	0.062	0.187	0.273	0.112	0.369*	0.257	0.170	0.512**	0.333	0.318	0.160
11	0.633**	0.061	0.086	0.232	0.294	0.180	0.301	0.227	0.297	0.410*	0.354	0.414*	0.226
12	0.342	0.165	0.199	0.190	0.423*	0.246	0.415*	0.258	0.243	0.110	0.292	0.550**	0.136
13	0.585**	0.188	0.251	0.404*	0.355	0.408*	0.509**	0.434*	0.376*	0.273	0.423*	0.591**	0.310

Table 5-2. 実習後に感じた課題と授業で学びたいこととの関連性(大学生)

	③ 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
④ 1	0.392*	-0.132	0.194	0.365*	0.281	0.316	0.319	0.490**	0.249	-0.143	0.034	0.034	0.322
2	0.183	0.432*	0.316	0.031	-0.039	0.208	0.459**	0.453*	0.123	-0.155	0.087	0.098	-0.003
3	0.230	-0.044	0.189	0.401*	0.221	0.272	0.162	0.462**	0.304	0.121	0.230	0.164	0.370*
4	0.261	-0.151	0.086	-0.020	0.123	0.255	0.278	0.247	0.156	0.138	0.216	0.029	0.202
5	0.385*	0.048	-0.069	0.235	0.431*	0.589**	0.669**	0.580**	0.476**	0.165	0.254	0.067	0.351*
6	0.205	0.077	0.068	0.007	0.360*	0.601**	0.393*	0.592**	0.212	-0.023	0.239	0.089	0.098
7	0.157	0.157	0.104	0.222	0.202	0.462**	0.432*	0.453*	0.291	0.181	0.247	-0.095	0.097
8	0.327	-0.071	0.091	0.047	0.282	0.502**	0.331	0.399*	0.187	-0.075	0.266	0.139	0.175
9	0.135	-0.011	0.088	-0.031	0.109	0.279	0.244	0.389*	0.073	-0.007	0.032	0.045	0.125
10	0.285	0.007	-0.103	0.144	0.217	0.269	0.139	0.444*	0.152	0.147	0.149	0.224	0.286
11	0.412*	-0.020	-0.051	0.084	0.240	0.401*	0.332	0.603**	0.248	-0.045	0.162	0.213	0.317
12	0.100	0.148	0.174	0.299	0.089	0.315	0.181	0.399*	-0.013	-0.075	0.108	0.278	0.175
13	0.205	-0.109	0.172	0.260	0.243	0.140	0.044	0.234	-0.012	0.092	0.208	0.198	0.278

ろうと予測されたのであるが、必ずしもそういう関連性が見出されたわけではない。短大生では、項目1の「豊かな人間性」の項目が「身につけたいこと」の多くの項目と相関が高い。また、項目7の「幼児の発達過程の理解」や項目12の「他の教員との関わり方」も多くの項目と相関している。大学生では、項目8の「障害児への配慮の仕方」と項目6「季節・地域性を考慮した環境構成のしかた」が全体的に多くの身につけたいことと関連性が強かった。

#### (4) 授業後の自己評価と「授業によって伸びた力」

授業後に尋ねた現在の力(Table 6.)については、平均値が3.0以下の低い自己評価だったのが、項目3の「学級経営の力」、項目8の「障害児への配慮の仕方」、項目13の「保護者との関わり方」の3項目である。平均値が4.0を超えているのは、項目2のみであり、どの学生もまだ十分な力を備えているとは思っていないことが見て取れる。

短大生と大学生を比較すると、短大生の方が、自己評価が全般的に高い。選抜された者の集団なので実際にそれらの力が身につけているのか、あるいは対象の短大生の自己評価が甘いのかはこの結果だけでは知ることができない。事前の質問紙では、授業前の自己評価としてではなく、実習後に感じた課

Table 6. 事後の現在の力

項目	短大	大学
1 豊かな人間性	3.38	3.59
	0.68	0.76
2 教員になる確かな意志	4.17	4.58*
	0.89	0.61
3 学級経営の力	2.72	2.69
	0.75	0.90
4 遊びを集団として指導していく力	3.14	3.12
	0.88	0.89
5 教育課程の理解	3.32	3.48
	0.82	0.80
6 季節・地域を考慮した環境構成のしかた	3.52	3.36
	0.63	0.70
7 幼児の発達過程の理解	3.59	3.47
	0.63	0.72
8 障害児への配慮の仕方	2.97	3.00
	0.73	0.79
9 幼児の表現活動への支援	3.66	3.25*
	0.77	0.80
10 いざこざ・けんかへの介入の仕方	3.28	3.18
	0.75	0.88
11 幼児一人ひとりへの配慮と受容	3.72	3.64
	0.65	0.65
12 教員との関わり方	3.55	3.21*
	0.63	0.70
13 保護者との関わり方	2.93	2.39*
	1.03	0.79

Table 7. 授業によって伸びた力

項目	短大	大学
1 豊かな人間性	3.52	4.03**
	0.69	0.81
2 教員になる確かな意志	4.07	4.64**
	0.80	0.65
3 学級経営の力	3.52	3.61
	0.63	0.90
4 遊びを集団として指導していく力	3.55	4.06**
	0.83	0.70
5 教育課程の理解	3.66	3.64
	0.72	0.93
6 季節・地域を考慮した環境構成のしかた	3.69	3.85
	0.85	1.00
7 幼児の発達過程の理解	4.07	4.16
	0.53	0.63
8 障害児への配慮の仕方	3.03	2.91
	0.78	1.01
9 幼児の表現活動への支援	3.83	4.15*
	0.71	0.67
10 いざこざ・けんかへの介入の仕方	3.07	2.97
	0.84	0.98
11 幼児一人ひとりへの配慮と受容	3.90	4.18
	0.67	0.73
12 教員との関わり方	3.66	3.76
	0.81	1.06
13 保護者との関わり方	3.59	3.76
	1.05	1.23

題としてのみ尋ねていたもので、直接の比較はできない。

「授業によって伸びた力」(Table 7.)については、平均値が3.0以上の値であるということは、プラスに働いたという認識を示すもので、全体的に授業の効果を感じていることが伺える。短大生の評価は大学生よりも低い。自己評価が高いことが授業による伸びを低く評価することにつながった可能性はあるが、必ずしも自己評価の高い項目が授業による伸びの低い評価項目というわけではない。大学生の方が「授業による伸び」が高かった項目としては、項目1の「豊かな人間性」・項目2の「教員になる確かな意志」、項目4「遊びを集団としてしどろしどろしていく力」および項目9の「幼児の表現活動への支援」の4項目である。短大生にとっては、実践力として必要であり、授業によってもっと伸ばすことができるような部分、例えば遊びを集団として指導していく力や幼児の表現活動への支援などについて、カリキュラムの工夫が必要だと示唆される。

##### (5) 今後さらに身につけたい力

Table 8.にあるように、短大生・大学生ともに、どの項目についても評定値が高く、もっと力をつけたいと考えていることがわかる。特に大学生の方が強くそう思っていることが示された。

さらに、自由記述を見てみると、短大生の方に、指導案を立てて、実際に保育を行った実践的な内容を評価する声が多かった。たとえば「指導案を書き、保育をして実際に子どもと関わる経験ができたので今まで習ってきたことを再確認でき、反省点もよくわかりました。」「実際に外の幼稚園に行き、実践することで、指導案の立て方、考え方等がどれだけ大変かわかった。経験出来てよかった。」などの意見があった。大学生は、より広範囲な記述であり、グループでの協同作業や、教員の多様な仕事への記述

などもあった。

また、「もっと専門的なこと」「障害児への配慮」「どうやって保育を進めていくか」等を実践的に学びたかった。」という意見も短大生に特徴的であった。

## 6. 平成 22 年度からのカリキュラムについて

以上の結果を踏まえ、平成 22 年開講の短大幼児教育学科の「教職実践演習Ⅱ」（平成 23 年度からは「保育・教職実践演習」と改称）のシラバスを次のように計画している（Table 9）。大学と異なる最大のポイントは、保育内容の指導力を高めるために、実技面の実践力を強化する授業内容を盛り込んだ点にある。

なお、平成 21 年度後期は短大も 2 クラス開講となるため、ほぼ履修希望者全員が履修できる見込みである。平成 21 年度後期の結果を参考としながら、平成 23 年度の必修化された後の「教職実践演習」科目の内容、およびそこに集約されていくカリキュラム全体の検討を進めていきたい。また、科目運営をめぐる効果の測定や、カリキュラム改善のための基礎資料を得る調査研究を、次のように予定している。

### (1) 履修学生を対象とした質問紙調査

平成 21 年度については、短大生 40 ～ 60 名程度の学生が対象となる。その調査結果や就職状況を、科目を履修していない学生と比較すること、及び大学 4 年生の履修者とも比較検討する。今回の調査の不備な点として、事前の事後評価と事後の自己評価の比較ができなかったことなどは改善する予定である。

### (2) 幼稚園長へのインタビュー調査

本学教職課程事後評価法検討委員会で行った小学校長への調査での経験から、筆者らで分担し、大阪府・兵庫県下の 30 名程度の公立幼稚園園長を対象としたいと考えている。できれば私立幼稚園長にもインタビュー調査を行いたいが、現在のところ数人程度しか開拓できそうになく、検討事項としていところである。できれば公立と私立の園長で、初任期教員に要求する資質能力が異なるのか、大学に期待することに相違があるのかを検討したいと考えている。

### (3) 幼稚園教諭に対する質問紙調査

幼稚園教諭に対する質問紙調査は、平成 22 年度に予定している。対象は、上記の園長の下で勤務する教諭を紹介いただき、少なくとも最終的に 50 名以上のデータを得たいと考えている。この質問紙調査においても、データ数よりは、カリキュラムの検討に活かせる情報を得るものとした。

大学・短大における教員養成全体が、多くの問題を抱え、社会人としての基盤力と実践力とを兼ね備えた人材の育成に苦慮しているが、特に本学短期大学部幼児教育学科においては、学力や生活態度の個

Table 8. 今後さらに身につけたい力

項目	短大	大学
1 豊かな人間性	4.71	4.91 *
	0.46	0.38
2 教員になる確かな意志	4.25	4.64 *
	0.93	0.78
3 学級経営の力	4.79	4.85
	0.42	0.44
4 遊びを集団として指導していく力	4.79	5.00 *
	0.50	0.00
5 教育課程の理解	4.46	4.67
	0.74	0.69
6 季節・地域を考慮した環境構成のしかた	4.71	4.85
	0.46	0.36
7 幼児の発達過程の理解	4.68	4.85
	0.48	0.44
8 障害児への配慮の仕方	4.75	4.94 *
	0.44	0.24
9 幼児の表現活動への支援	4.68	4.91 *
	0.48	0.29
10 いざこざ・けんかへの介入の仕方	4.71	4.82
	0.53	0.46
11 幼児一人ひとりへの配慮と受容	4.79	4.85
	0.42	0.44
12 教員との関わり方	4.75	4.94 *
	0.44	0.24
13 保護者との関わり方	4.82	4.97 *
	0.39	0.17



Table 9. 平成 22 年度開講の短教「教職実践演習Ⅱ」シラバス概要

授業 目標	将来教員になる上で必要な資質能力についての自己の課題を自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、保育・幼児教育の担い手としての生活をより円滑にスタートできるよう演習を行う。
授業 の 概要	教員として身につけておくべき事項を、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児理解や学級経営に関する事項、④保育内容の指導力に関する事項、という 4 つの観点から、少人数クラスでの演習、討論、実技、観察などを通じて学ぶ。
授業 計画	<p>〈オリエンテーション〉</p> <p>(1) 本演習の目的と進め方</p> <p>〈使命感や責任感、教育的愛情に等に関する事項〉</p> <p>(2) 現職教員(管理職)が、近年の職業上の課題などについて話し、学生と懇談する。 懇談後は、グループでの討論を互いに発表する。</p> <p>〈社会性や対人関係能力に関する事項〉</p> <p>(3) 幼稚園教諭・保育士としての仕事(園務を含む)。……(付属幼稚園)</p> <p>(4) 保護者への対応を、ロールプレイングを通じて学ぶ。</p> <p>〈幼児理解や学級経営に関する事項〉</p> <p>(5) 心理学から見た幼児理解と、幼稚園・保育園クラス観察への準備</p> <p>(6) 幼稚園・保育園クラス観察、及び観察結果の報告と総括…(付属幼稚園・附属保育園)</p> <p>〈保育内容の指導力に関する事項〉</p> <p>(7) 保育の指導力を高める—幼児の動きに合わせたピアノ伴奏(1)</p> <p>(8) 保育の指導力を高める—幼児の動きに合わせたピアノ伴奏(2)</p> <p>(9) 保育の指導力を高める—幼児の律動と表現活動(1)</p> <p>(10) 保育の指導力を高める—幼児の律動と表現活動(2)</p> <p>(11) 実習に向けて(手遊び・読み聞かせ・表現活動・ゲーム・制作などの設定保育の計画と準備)</p> <p>(12) 幼稚園・保育園での設定保育実習(1) 園の先生の意見・感想も伺い、問題点を班で討論する。…(付属幼稚園・附属保育園)</p> <p>(13) 幼稚園・保育園での設定保育実習(2) 前回の反省を活用し、また園の先生とともに反省会をもつ。…(近隣の幼稚園・保育園)</p> <p>(14) 設定保育実習の総括と、授業全体の総括</p> <p>〈使命感や責任感、教育的愛情に等に関する事項〉</p> <p>(15) 幼児教育に携わる者としての職業観・責任感について(演習全体の総括)</p>
評価	「レポート」45 点(15 点×3)、「実技」30 点(15 点×2)、「ポートフォリオ」25 点

人差の拡大という状況の中で、現場が要求するレベルでの実践力を持って保育に携われるように、今まで以上に力を入れて保育者養成を行っていかねばならない。そのためにも、調査研究や授業による介入の前後の変化を客観的に把握しながら、カリキュラム改善及び授業改善を果たしていきたい。

## 引用文献

- 1) 武庫川女子大学教職課程事後評価法検討委員会, 2008, 地域のニーズに応え、信頼される教職実践力を育む「教職課程」の課程認定後の事後評価法に関する調査研究—特に小学校教職課程に係わる課程認定事後評価指標を主たる対象として—
- 2) 水谷孝子 第7章現代の若い保育者 水谷孝子編著, 育ちの保育, 八千代出版, 2008